

家庭的に恵まれず、貧窮と流浪のうちに死んだ野雁は、歌を詠むことと万葉集の研究にみずから慰めた。家集に『野雁集』があり、明治になってから佐佐木信綱らによって認められ、世に知られるようになった。

いづこかはさしてわがやどゆきまじり野にも山にも花のへに寝む

何事を思ふとなしの酔泣にたねなくおつる我なみだかな



七句より成る)である。

また、友人鹿柴哲人(向鎌田月の輪の人)が、土湯本宮、二本松に遊んだ自分の行状を、台州が指導する信達詩人たちに筆記させ、これに台州が筆を入れて成

った「魚籃先生春遊記」(天明元)も福島に関わる書である。

『徒然草』にならって、日本や唐の国(中国)の故事や自分の見聞を記したもので、仮名草子に共通する教訓的内容となっている。一般読者特に武士や学者が読むことを期待していたようで、社会、人生に関する意見や教訓を中心に、法談、小咄等も混えている。

二本松の藩儒、大鐘義鳴はその著「相生集」の中で、『可笑記』を齋藤家から借りて読んだことを記しており、これから長らく不明であった著者が親盛であることが、十余年前に明らかになった。



黒塚は平兼盛の「みちのくのあだちが原の黒塚に鬼こもれりど聞くはまことか」の古歌にちなむ名所で、古くは『大和物語』、謡曲『黒塚』(観世流「安達原」とも)となり、また江戸時代の浄瑠璃歌舞伎、『奥州安達原』となつて世に知られている。

謡曲は山伏祐慶が鬼女の家に一泊し、念力で災難をまぬがれる話であり、歌舞伎は安倍家再興を計る一族と、源義家との対立のなか、安倍方の岩手御前が鬼女の役割で登場する話である。

真弓山観音寺境内には観音堂と鬼の住んだという岩屋(奇岩大石の集まり)がある。黒塚というのは、観音寺の門前を左(北)に行つた所にあり、鬼をうずめた所だと、おくのほそ道の芭蕉も聞かされている。

明治になり児童文学者巖谷小波は『日本昔噺』全一四編の中で『安達か原』を書き全国の子供たちに愛読された。

安藤野雁(あんどう・ぬかり)文化二丁(慶応三・三二四)半田銀山の役人の家に生まれ、瀬上の内池永年の門人となり、共に本居大平に師事。主家の職任にともない大分の日田、江戸と移り、その後放浪のうちに埼玉の熊谷で没した。旅中も筆を放さなかった「万葉集新考」は、畢生の事業である。

熊阪台州(くまか・たいしゅう)

元文四・四二(享和三・三二二)、伊達郡高子(現、保原町)生。江戸時代の漢詩人。名は定邦また邦(ほう)、字(あきな)は子彦、通称宇右衛門、宝暦一〇(一七六〇)年江戸に遊学、郷里では白雲館(自宅)社中の人々と詩文を通じて交わる。窮民の救済にもあつた。

著作に「西遊紀行」、「水鏡編」、「含錦(かんとう)紀事」(児童向け話の漢訳、「律詩大眼」などがある。



白雲館跡

齋藤親盛(さいとう・ちかもり)？(延宝三)山形の最上家臣の家に生まれ、浪人して武蔵の国(江戸近かに住んでいた、その人物を知った二本松藩主丹羽光重が、親盛の子秋盛を召ししかえて以来、二本松に住むようになったらしい。二本松には子孫が現在も在任し、松岡寺には親盛一族の墓がある。

金春禪竹(こんばる・ぜんちく)

応永二丁(文明三)能登者、能作者。社若(かきつばた)「小督(こく)」など多くの謡曲を書いたが、その全体像はまだ明らかではない。能楽論も多い。

ふくしまの古典文学